野田雅之*: 九州山部層からアンモナイトの発見

Masayuki NODA : Discovery of Ammonites from the Yamabu formation, Kyushu

(1972 年 6 月 19 日 受理)

山部層 (藤井, 1954) は大分県三重町の南方に東西約 6km, 南北最大 1.2km にわたって分布し, 西南日本外帯の秩父帯に断片的に露出する白亜系の一つである。その北縁, 東縁, 南縁の東半部は断層をもって古生層に接するが南縁の西半部では, 古生層を不整合におおっている。厚さ約 450m ではほぼ東西を軸とする向斜構造を示す。本層には礫石にはじまる堆積の小輪廻が 4 回観察される。それらの岩相については藤井(1954), 寺岡(1970)の記載がある。藤井は砂岩の岩質が堅硬な長石質石英砂岩であること, ならびに産出化石群が礫石型汽水性貝化石で特徴づけられていることなどから, その基底から中

部にかけては四国の礫石層, 八代地域の川口層に対比され, その系統は礫石統に属するものと結論した。その後, 松本 (1967) も本層を礫石統として扱っており, 寺岡はこの層について高知統の名称を用いてはいるがいずれにしても本層が前述の各層とともにヨーロッパ標準地域のウィールデンにほぼ相当するであろうといわれていた。

著者は 1970 年から '71 年にかけて本層の基底礫岩中に夾在する黒色頁岩から 2 種のアンモナイト 5 個体を採集した。(産地, 第 1 図。YB 101, 東径 $131^{\circ}38'34''$, 北緯 $32^{\circ}55'6''$, 大分県南海部郡本匠村新開) そのうちの 1 個が *Berriasella patula* SCHNEID にきわめて近似し

第 1 図 山部付近地質図 (寺岡, 1970より引用)

* 大分市立穂田中学校

ているものであった。MAZENOT (1939) によれば該種はフランスの Neuburg に発達するジュラ系チトニアン下部だけでなく、Böschaine, Berrias, Bournet の白亜系ベリアシアンからも産出するという。彼の報告による該種の生存期間については若干の疑問があるが、この産出により山部層の基底は新しくともベリアシアンに相当することになり、また随伴する他のアンモナイト化石とともにその産出はその部分が海成堆積物であることを裏書きするものである。このことは本層が非海成の鎮石統に属し、ヨーロッパのウィルデンにほぼ相当するという従来の常識を再吟味しなければならないことを示唆するものである。

さきに佐藤正 (1958, 1961 a, b) は北上山地のジュラ系チトニアン的小小汐層に整合に重なる白亜系の磯草層から *Berriasella akiyamae* SATO, *Thurmanniceras isokusensis* KOBAYASHI and FUKADA を、長崎層から *Berriasella* sp. ex gr. *B. berthel* TOUCAS, *Spiticeras* (S.) cf. *binodiger* UHLIG, *Olcostephanus* sp. *Kilianella* juv. sp. を記載した。これらはいずれも世界各地のベリアシアンからバランギニアンを特徴づける種属で、これによってわが国にも非海成の鎮石型堆積物の外に、その時代と同時異相の、またそれよりも時代的にやや遡るベリアシアン型アンモナイトを含む海成層の存在することが確認された。同じような事実は熊本県海ノ浦層でも認められている (田村, 1960 a ; SATO, 1961 a, b ; 松本ら, 1962)。

ところで、ヨーロッパでジュラ紀・白亜紀の境界についていろいろな視点から論議されている現在、地理的に隔絶されたわが国において山部層からこのような事実が発見されたことは、松本ら (1962), SATO (1958, 1961 a, b) 田村 (1960 a, b) の報告と相まってわが国がこの国際的な問題に新しい資料を提供することになる。

なお、化石の記載をもふくめた詳細については、いずれ機をあらためて発表の予定である。

本文を草するにあたり、御指導を賜った九州大学松本達郎教授、ならびに有益な御教示を頂いた東京大学佐藤正先生、資料の引用を快諾下さった地質調査所の寺岡易司博士に対し謝意を表する。

文 献

藤井浩二 (1954), 大分県臼杵地域の層序と構造 (1). 地質雑. vol. 60, p. 413—427.
松本達郎・野田光雄・宮久三千年 (1962), 日本地方地質

第2図 山部層柱状図

第3図 *Berriasella* sp. aff. *B. patula* SCHNEID
大分県南海部郡本匠村新開産、山部層基底部 (1970年 野田雅之採集)

- 誌「九州地方」240 p. 朝倉書店・東京。
松本達郎 (1967), 白亜紀, 改訂新版地史学下巻 p. 442—443.
MAZENOT, G. (1939), Les Palaeohoplitidae Tithoniques et Berriasien du Sud-Est de la France. *Mem. Soc. Géol. France*, No. 41, p. 60—61.
SATO, T. (1958), Présence du Berriasien dans la stratigraphie du plateau de Kitakami. *Bull. Soc. Géol. France*, vol. 6, p. 589—599.
—— (1961 a), La Limit Jurassico-Crétacée dans la stratigraphie Japonaise. *Jap. Jour. Geol. Geogr.*, vol. 32, p. 533—541.
—— (1961 b), Faune Berriasienne et Tithonique Supérieure nouvellement découverte au Japon, *Ibid.* p. 543—551.
寺岡易司 (1970), 九州大野川盆地付近の白亜紀層. 地質調査所報告. 237号 p. 1—87.
田村 実 (1960 a), 坂本層群—九州—の層位学的研究. 地質雑, vol. 66, p. 371—383.
—— (1960 b), 鳥の巣層群類似層の層位学的研究. 熊本大学教育学部紀要, no. 8, 特別号. p. 1—40.